蘇軾詩注解（二十五）

山本和義
蔡　毅
中　裕史
中　純子
原田直枝
西岡　淳
（南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

次韻して銭穆父・蔣穎叔・王仲至に和し奉る　四首（一九一九～一九二二：「西湖の月下に琴を聴く」に和せらる、「仇池」に和せらる、玉津園、藉田）

頃年、楊康功　高麗に使して、還って奏して海神廟を板橋に立てんことを乞う。僕　其の地の湫隘なるを嫌って、書を移して之を文登に遷さしめて古廟に因りて之を新たにせんとす。楊　竟に従わず。知らず、定国　何れ従

一

りしてか此の書を見て、詩を作って称道して已まず。僕　其の云何というかを記す能わざるなり。次韻して之に答う。（一九二三）

啓聖の僧舎に沐浴して趙徳麟と邂逅す（一九二四）

王仲至が「雪を御筵に喜ぶ」に次韻す（一九一八）

僕が蔵する所の仇池石は希代の宝なり。王晋卿　小詩を以て借りて観る、意は奪わんとするに在り。僕　敢えて借さずんばあらず、然るに此の詩を以て之に先んず（一九二六）

天の字の韻に次ぎて岑嚴起に答う（一九二七）

叔盎が画ける馬に和す（一九三〇）

一九一九～一九二二（施三三―三～三三―六）

次韻奉和錢穆父蔣穎叔王仲至四首

次韻して錢穆父・蔣穎叔・王仲至に和し奉る　四首

一九一九（施三三―三）

見和西湖月下聽琴

「西湖の月下に琴を聴く」に和せらる

1　謖謖松下風　　謖謖たり　松下の風

2　靄靄隴上雲　　靄靄たり　隴上の雲

3　聊將竊比我　　聊か窃かに我に比するを将て

4　不堪持寄君　　持して君に寄するに堪えず

5 半生寓軒冕　半生　軒冕に寓し
6 一笑當琴尊　一笑　琴尊に当たる
7 良辰飲文字　良辰　文字を飲めば
8 晤語無由醺　晤語　醺うに由無し
9 我有鳳鳴枝　我に鳳鳴の枝有り
10 背作蛇蚹紋　背に蛇蚹の紋を作す
11 月明委靜照　月明らかにして静照に委ね
12 心清得奇聞　心清くして奇聞を得たり
13 當呼玉澗手*　当に玉澗の手を呼んで
14 一洗羯鼓昏　羯鼓の昏を一洗すべし
15 請歌南風曲　請いて南風の曲を歌わしめて
16 猶作虞書渾　猶お虞書の渾を作さん

〔原注〕家有雷琴甚希古、玉澗道人崔閑妙於雅聲、當呼使彈（家に雷琴の甚だ希古なる有り。玉澗道人崔閑　雅声に妙なり。当に呼びて弾ぜしむべし）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。兵部尚書・侍読として都の開封に在った。

○銭穆父　銭勰のこと。穆父はその字。作品番号一六一六「銭越州に次韻す」詩の注（『蘇軾詩注解（三）』）を参照。この時には権戸部尚書の任に在った（『続資治通鑑長編』元祐七年六月戊辰の条を参照）。○蔣穎叔　蔣之奇のこと。穎叔はその字。作品番号一九〇六・一九〇七「蔣穎叔・銭穆父が景霊宮に従駕するに次韻す　二首」詩の注（『蘇軾詩注解（二十四）』）を参照。この時には戸部侍郎の任に在った（『続資治通鑑長編』元祐七年六月甲戌の条を参照）。○

王仲至　王欽臣のこと。仲至はその字。作品番号一六〇二「葉公秉、王仲至和せらる、次韻して之に答う」詩の注（『蘇軾詩注解（一）』）を参照。この時には工部侍郎の任に在った（『続資治通鑑長編』元祐六年九月癸卯の条を参照）。この三人が和した詩は伝わらない。○西湖月下聴琴　作品番号一七八六「九月十五日、月を観て琴を西湖に聴きて坐客に示す」詩（『蘇軾詩注解（十三）』）のこと。

1○謖謖　強い風の音のさま。『世説新語』賞誉篇に「世に李元礼（膺）を目すらく、謖謖として勁松下の風の如し、と」とある。2○靄靄　雲がおだやかにかかるさま。「九月中に曾て二小詩を南渓の竹上に題す……」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊五六一頁）を参照。○隴上雲　隴は小高い丘のことだが、隴雲という場合は、山にかかる雲の意に近い。例えば、作品番号一七六八「子由が王晋卿の画ける山水に一首を書し、而して晋卿が和するに次韻す　二首」その一（『蘇軾詩注解（十二）』）に、「隴雲　我に寄す　山中の信、雪月　君を追わん　渓上の舟」という。その詩の注を参照。3○窃比　『論語』述而篇に、「述べて作らず、信じて古を好む、窃かに我が老彭に比す」とある。4○不堪一句　梁の陶弘景は、句曲山（江蘇省）に隠棲した後、斉の高祖に「山中　何の有る所ぞ」と問われて、「山中　何の有る所ぞ、嶺上　白雲多し、只だ自ら怡悦す可く、持して君に寄するに堪えず」と答えたという（『太平広記』巻二〇二に引く『談藪』）。2句の注に引く作品番号一七六八の詩の注を参照。5○軒冕　高官。また、高位高官の世界。軒は高位の人が乗る車、冕はかんむりのこと。『荘子』繕性篇に、「古の所謂志を得るとは、軒冕の謂に非ざるなり」とある。6○琴尊　琴樽（琴と酒樽）に同じ。謝朓「宋記室が省中に和す」詩（『謝宣城詩集』巻四）に、「琴尊を阻むを嘆く無かれ、伊水の側に相従わん」とある。7○良辰　めでたい日。日柄のよい日。「楊褒の「早春」に次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊一九一頁）、および詩題の注にあげた「九月十五日、月を観て琴を西湖に聴きて坐客に示す」詩（『蘇軾詩注解（十三）』）を参照。○飲文字　詩文を作りつつ酒を飲むこと。「文字の飲」ともいう。作品番号一八三七「洞庭の春色　并びに引」詩の注（『蘇軾詩注解（十九）』）を参照。8○晤語　向かい合って語る。語り合う。晤は、むかいあう意。『詩経』陳風「東門之池」に、「彼の美なる淑姫、与に晤言す可し」とある。9 10○我有・背作二句　鳳鳴枝は、鳳凰が棲むとされた梧桐の木のこと（琴は桐の木を用いて作られる）。『詩経』大雅（生民之什）

「巻阿」に、「鳳凰　鳴きぬ、彼の高岡に、梧桐　生ず、彼の朝陽に」とあり、鄭箋に「鳳凰の性たるや、梧桐に非ずんば棲まず、竹の実に非ずんば食せず」とある。蛇蚺は、蛇の蛇腹。『荘子』斉物論篇に、「吾れは蛇蚺・蜩翼を待つか」とあり、『経典釈文』に司馬彪を引いて、「蛇が腹下の齟齬にして以て行く可き者なり」という。原注にいうように、蘇軾は雷琴（唐の琴作りの名人・雷氏の手に成る琴。『唐国史補』巻下）を所蔵していた。「雑書琴事　十首」その一「家蔵の雷琴」（『蘇軾文集』巻七一）に、「余が家に琴有り、其の面　皆な蛇蚺の紋を作す」とある。11〇月明一句　謝荘「月の賦」（『文選』巻一三）に、「照を委ねて呉業昌え、精を淪めて漢道融る」とあるように、委の字は（光を）落とす意にも取りうるが、ここではゆだねる意に解した。13〇玉澗　原注にいう玉澗道人崔閑のこと。星子（江西省）の人。字は誠老。蘇軾とは特に琴曲を通じた交わりがあった。宋の沈遵は、滁州（安徽省）に左遷された欧陽修が山水の声に感動した経験に因んで、琴曲「醉翁吟」を作った。その二人が没して後、沈遵の知友であった崔閑が、その曲に詞がないのを惜しみ、蘇軾に依頼して成ったのが「醉翁操」（『合注』巻五〇）で、これが好事家の伝えるところとなったという（宋・王闢之『澠水燕談録』巻七）。14〇羯鼓　西域由来の鼓の一種。唐の玄宗が特に好んで奏した。「開元天宝遺事」を読む　三首」その一の注（『蘇東坡詩集』第一冊三五九頁）を参照。15〇南風　古代の聖帝舜が、五弦の琴を奏してうたったという歌の名。「東陽の水楽亭」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊五三頁）を参照。16〇猶作一句　虞は、舜が堯から天下を譲られて帝位に在った時代。『尚書』でその時代のことを記した部分（堯典、舜典など）のことを、虞書と称する。渾は、奥深く大きいさま。渾渾に同じ。『法言』問神篇に、「虞夏の書は渾渾爾たり」とある。〇〔原注〕　13句の注を参照。

松林のあいだをサーッと吹きわたる風と、山の上になごやかにかかる雲、それらをひそかに我が身にたとえてくださっても、（それを）そちらに送りとどけることはできません。

これまでずっと高位高官の世界に身を寄せるばかりで、楽しみといえば琴と酒ぐらいだったけれども、めでたい日に皆で詩文を以て宴集して語り合えれば、酒に酔いしれるようなこともないはずだ。

五

六

わたしの手もとにあるのは、鳳凰が棲むという桐の木で作った一面の琴、その背には蛇腹のような紋様がある。静かな月の光に照らされるままにこの琴を奏でれば、妙なる調べに心も澄むことだろう。ここはひとつ名だたる弾き手の玉澗道人をお呼びして、羯鼓の音に汚された耳を洗い清め、さらに舜が民を和ませたという南風の曲を歌って、奥深い虞書の気分をあらわしていただきたいものだ。

一九二〇（施三三―四）

見和仇池

「仇池」に和せらる

1 上窮非想亦非非　上は非想　亦た非非を窮め
2 下與風輪共一癡　下は風輪と共に一痴
3 翠羽若知牛有角　翠羽　若し牛に角有るを知らば
4 空瓶何必井之眉　空瓶　何ぞ必ずしも井の眉にせん
5 還朝暫接鵷鸞翼　朝に還りて暫く鵷鸞の翼に接す
6 謝病行收麋鹿姿　病と謝して行ゆくは麋鹿の姿を収めん
7 記取和詩三益友　記取せよ　詩に和する三益友
8 他年弭節過仇池　他年　節を弭めて仇池に過れ

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○仇池　甘粛省にある山。その名は山頂に池があることに因む。山の洞穴が洞天福地に通じるといわれることから、道教の聖地とされた。蘇軾は揚州に在るとき二つの石を手に入れたが、その形状から以前にみた仇池に関わる夢を想起した。そこで杜甫「秦州雑詩」その十四（『杜詩詳注』巻七）の二句「万古　仇池の穴、潜かに通ず　小有天に」を誦して詠じたのが、「双石」詩（『合注』巻三五。詩人選集『蘇軾』下・五〇頁）で、この詩はその韻を用いる。

12○上窮・下与二句　仏教では、物質の存在しない世界（無色界）を四段階に分かつ（四無色処）が、その第四が非想非非想処（想念が有るのでもなく無いのでもない状態）で、それを認識することを非想非非想定と呼び、諸禅定の中で最もすぐれたものとする（『大正蔵』第五巻に収める『大般若経』巻七「初分転生品」）。同じく仏教では、物質的な世界を三層に分かち、最下層を風輪といい、その上の水輪・金輪と合わせて三輪と呼ぶ（『大正蔵』第一〇巻に収める『華厳経』巻五〇「如来出現品」）。二句は、物質の存在しない世界の最上の段階から、物質でできた現実世界の最下層まで、などということを仏教では想定して言うけれども、そうした見方自体が愚かしい幻想に過ぎないという意。白居易「微之に和する詩　二十三首、晨霞に和す」詩（『白居易集箋校』巻二二）に、「上は非想の頂より、下は風水の輪に及ぶ」とある。3○翠羽一句　翠羽は、孔雀のみどり色の羽。杜甫「赤霄行」（『杜詩詳注』巻一四）に、「孔雀　未だ知らず　牛に角有るを、渇して寒泉に飲みて觝触に逢う、翠尾　金花　辱を辞せず、赤霄玄圃　須く往来すべし」とある（赤霄は、仙界の赤く美しい空の色。玄圃は、崑崙山にある仙人の居所）。冒頭の二句で仏教的な世界観を否定した後、これ以下は仇池に象徴される道教的世界を専ら称揚する。4○空瓶一句　眉は、ふち、へりの意。『漢書』遊侠伝の陳遵の伝に、揚雄「酒箴」（『藝文類聚』巻七二などでは「酒の賦」と題する）を引いて、「子は猶お瓶のごとし。瓶の居るを観るに、井の眉に居り、高きに処りて深きに臨む、動もすれば常に危うきに近し」とある。以上の二句について、一韓智翃は（12句を承けて）「其（ノ）内ノ世間ニ禍難ノアル事ハ、譬（ヘバ）孔雀ガ泉ヲ飲（ミ）テ、牛角ニ触（レ）テ、牛角ニツカレタガ如キゾ。此（ノ）理ヲ若シ能（ク）知（リ）タラバ、早ク引（キ）去ルベキヲ、知（ラ）ズシテ、仕宦シテ危険中ニ居（レ）バ、譬ヘバ井ノ湄ニ在（リ）テ井ニ落（チント）欲（スル）ホドノ事ゾ」（『四河入海』巻一九の三）と記す。5○鵷鸞　鵷雛と鸞。いずれも鳳凰の一種で、朝廷

に整然と居並ぶ百官を喩える。また、りっぱな人物の意にも用いる。鴛鸞、鵷鴻、鵷鷺などともいう。「范景仁が洛中に遊ぶを送る」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊一九四頁）を参照。6○謝病　病気を口実にしてことわること。『史記』司馬相如伝に、「長卿　病と謝して往く能わず」とある。○麋鹿　オオジカと鹿。山林に住まう人の喩え。蘇軾は、「孔文仲推官の贈らるるに次韻す」詩（『蘇東坡詩集』第二冊三七一頁）において、この語を用いて自らの本性を、「我は本と麋鹿の性、諒に轅に伏する姿に非ず」と述べる。その詩の注を参照。欧陽修「早朝、事に感ず」詩（『居士集』巻一三）に、「羽儀　鴛と鷺とに接すと雖も、野性　終に存す　鹿と麋と」とある。7○三益友　『論語』季子篇に、「益者三友、損者三友、直きを友とし、諒を友とし、多聞を友とするは、益なり。便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは、損なり」とある。『論語』では交わって有益な三種類の友人の意だが、ここでは銭勰・蔣之奇・王欽臣の三人をさす。8○弭節　歩みをとどめる。歩みをゆるめる。『四河入海』は「節ヲ弭シテ」と訓ずる。「神女廟」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊一一九頁）を参照。仇池は、将来の東坡の居所を仙界に喩えたもの。「双石」詩（詩題の注を参照）の結びに、「一点の空明　是れ何れの処ぞ、老人　真に仇池に住せんと欲す」とある。

上は無念無想の最高の境地を窮め、また下は風輪の最下層まで知ったとしても、そうした見方そのものは、いずれも愚かしい幻想に過ぎない。翠羽の孔雀は牛に角があることを知っていれば、その角で突かれることもあるまいし、空の釣瓶だって危険な井戸べりにわざわざ身を置くこともないというものだ。

いま私は朝廷にもどり、暫くは居並ぶ百官の列に加わるけれども、ゆくゆくは療養のお暇をいただいて野鹿の姿にもどるつもりだ。こうして詩を唱和しあう三人の大切な友よ、どうか忘れないでほしい。いつか私の住まう仇池を通りかかった時には、どうか旅の脚を緩めて立ち寄ってくれたまえ。

一九二一（施三三―五）

玉津園
玉津園

1 承平苑囿雑耕桑
2 六聖勤民計慮長
3 碧水東流還舊派*
4 紫壇南峙表連岡
5 不逢遅日鶯花亂
6 空想疎林雪月光
7 千畝何時躬帝藉
8 斜陽寂歴鎖雲荘

承平の苑囿　耕桑を雑う
六聖　民に勤めて計慮長し
碧水　東に流れて旧派に還り
紫壇　南に峙って連岡に表る
遅日　鶯花の乱るるに逢わず
空しく　疎林　雪月の光を想う
千畝　何れの時か帝藉を躬らせん
斜陽　寂歴として雲荘を鎖す

〔原注〕玉津分蔡河上流、復合於下（玉津は蔡河を上流に分かちて、復た下に合す）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○玉津園　開封の庭園の名。五代後周のときに造営され、南の外城の門である南薫門の外にあった（明・李濂『汴京遺跡志』巻八「園」）。

1○承平　平和の世が長く続くこと。太平を受け継ぐ意。『漢書』食貨志上に、「今　累世　平を承け、豪富吏民は、訾　鉅万を数う」とある。○苑囿　鳥獣を放し飼いにしてある庭園。『呂氏春秋』重己篇に、「昔　先聖王の苑囿園池を為るや、以て観望して形を労うに足る而已」とあり、高誘注に「禽獣を畜う所、大なるを苑と曰い、小なるを囿と曰う」とある。○耕桑　農耕と養蚕。『韓詩外伝』巻一に、「百姓大いに説び、耕桑する者　力を倍して以て勧む」と

一〇

ある。2〇六聖　王注（趙次公）によれば、宋の太祖、太宗、真宗、仁宗、英宗、神宗。3〇碧水一句　原注にある蔡河（恵民河）は、開封の南を流れる運河で、玉津園の近くを流れていた（『汴京遺跡志』巻七「蔡河」）。4〇紫壇紫色の祭壇（壇は、土を盛り固めて作った祭祀の場）。『漢書』礼楽志に引く「郊祀歌」十九章「天地」に、「爰に紫壇を熙し、厥の路を求めんことを思う」とあり、顔師古の注に「紫壇は、壇の紫色なるなり」とある。5〇遅日　春の日。暮れるのが遅く感じられる日。杜甫「絶句　二首」その一（『杜詩詳注』巻一三）に、「遅日　江山麗し、春風花草香る」とある。〇鶯花　ウグイスがさえずり花が咲く春景色。杜甫「李梓州・王閬州・蘇遂州・李果州の四使君に陪して恵義寺に登る」詩（『杜詩詳注』巻一一）に、「鶯花　世界に随い、楼閣　山巔に倚る」とある。7〇千畝一句　天子が春先に自ら耕作をおこなって、神に豊作を祈願する儀式を藉（籍）といい、耕す田畑のことを藉田（籍田）といった。ここでいう帝藉はその意。次の詩（作品番号一九二二）の注を参照。『礼記』祭義に、「是の故に昔者天子千畝を藉するを為す」とある。また、月令「孟春之月」に、「乃ち元辰を択びて、天子親ら耒耜（すき）を載せて、之を参保介（陪乗）と御（御者）との間に措き、三公・九卿・諸侯・大夫を帥いて、躬ら帝籍を耕す」とある。〇寂歴　寂しく静かなさま。江淹「雑体詩　三十首、王徵君」（『文選』巻三一）に、「寂歴として百草晦き、欻吸として（にわかに）鵑鶏悲しむ」とある。〇雲荘　雲や霧におおわれた村里。唐・馬懐素「「九月九日、慈恩寺の浮図に登る」に和し奉る　応制」詩（『全唐詩』巻九三）に、「御旗　日道に横たわり、仙塔　雲荘に儼かなり」とある。〇原注　『汴京遺跡志』巻七「蔡河」に、「其の　尉氏自り北流し、汴京の戴楼門の東の広利水門に至りて城に入る、西蔡河と名づく。閔水に接して、城内を繚繞す。其の　陳州門の西の普済水門従り城を出で、流れて通許を経、復た旧の蔡河に接す、東蔡河と名づく、即ち所謂恵民河なり」とある。

太平の御代が続いた御苑には耕作と養蚕の場もあり、六代にわたって聖帝の民への叡慮は長く保たれた。碧色の流れは東へと流れてもとの川に合流し、紫色の祭壇は都城の南にそばだって連なる岡に際立つ。花さき乱れ鶯の鳴く遅々たる春日にはめぐり逢わず、まばらな林を照らす雪と月の光をただ想ってみる。千

畝の土地を天子御みずから耕されるのはいつのことだろう。もやに包まれた村を夕陽がひっそりと照らしている。

一九二二（施三三―六）

藉田

藉田

1 竊脂方紀瑞　窃脂 方に瑞を紀し
2 布穀未催耕　布穀 未だ耕を催さず
3 魚沫依蘋渚　魚沫 蘋渚に依り
4 蝸涎上綵楹　蝸涎 綵楹に上る
5 江湖來夢寐　江湖 夢寐に来たり
6 蓑笠負平生　蓑笠 平生に負く
7 琴裏思歸曲　琴裏 思帰の曲
8 因君一再行　君に因りて一再行

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○藉田　古代、天子が春先に自ら田畑の耕作を行い、神や祖先に豊作を祈願した。その田畑を藉田という（籍田とも表記する）。藉は、民の力を借りる意という。『詩経』周頌（閔予小子之什）「載芟」の小序に、「載芟は、春、藉田して社稷に祈るなり」とあり、毛伝に、「王の耒耜を載せて耕す所の田、天子は千畝、諸侯は百畝なり。籍の言は借

なり。民の力を借りて之を治む、故に之を籍田と謂う」とある。

1○窃脂　鳥の名。イカル（『国訳本草綱目』によれば、シナイカル）。『詩経』小雅（甫田之什）「桑扈」に、「交交たる桑扈、鶯たる其の羽有り、君子　楽しむ、天の祜いを受く」とある。その毛伝に、「興なり。鶯然として文章有り」とあり、鄭箋に「桑扈は、窃脂鳥なり。興なるは、窃脂　飛んで往来して文章有り、人　観視して之を愛し、君臣の礼法威儀を以て朝廷に升降するに喩うれば、則ち天下も亦た観視して仰いで之を楽しむ」とある。また、『春秋左氏伝』昭公十七年に、「九扈を九農正と為す」とあり、その杜預の注に窃脂の名が見え、孔疏が賈逵を引いて「桑扈・窃脂は蚕の為に鳥を駆る者なり」という。2○布穀　カッコウの異名。その鳴き声は「穀を布け」と聞こえるという。「山村　五絶」その二（『蘇東坡詩集』第二冊五〇七頁）を参照。3○魚沫　魚が吐くあぶく。『荘子』天運篇に、「泉涸れて魚相与に陸に処り、相呴くに湿を以てし、相濡すに沫を以てするは、江湖に相忘るるに若かず」とある。4○蝸涎　カタツムリの出す粘液。また、カタツムリが通ったところにその粘液でできる跡。杜牧「華清宮　三十韻」（『樊川文集』巻二）に、「鳥啄　寒木を摧き、蝸涎　画梁を蠹む」とある。○綵楹　彩色をほどこした柱。楹は、まるく太い柱。綵は、いろどりの意で、彩に通じる。5○夢寐　寝ているときにみる夢。『後漢書』郎顗伝に、「夙夜夢寐に、心を尽くして計る所なり」とある。6○蓑笠　みのとかさ。隠者としての暮らしを象徴する。温庭筠「秋日」詩（『全唐詩』巻五七七）に、「良時　東菑有らば、吾れ将て蓑笠を事とせん」とある。7○思帰曲　「思帰の引」は、琴の楽曲名。春秋時代、召王は衛の賢女を娶ろうと召に招いた。女が至る前に王は薨じたが、太子が女を召に留めおいて還さなかったため、女は衛に帰ることを願い、琴にのせて歌をうたって縊死したという（蔡邕『琴操』巻上「思帰の引」）。晉・石崇「思帰の引の序」（『文選』巻四五）では、石崇が昔日の別荘での暮らしを思って古曲に歌辞をつけたとする。8○一再行　『史記』司馬相如伝に、「酒酣にして、臨邛の令　前みて琴を奏めて曰く、「窃かに聞く、長卿之を好む、と。願わくは以て自ら娯しまんことを」と。相如辞謝し、為に鼓すること一再行」とあり、索隠に「行は、曲なり。此に「鼓すること一再行」と言うは、一両曲を謂うなり」とある。

窃脂が瑞兆を示すいま、布穀はまだ耕作を促してはいない。浮き草の浮く水際には魚が口をパクパクさせて

吐く泡が立つ。彩られた柱には蝸牛がつたった跡。

それはまるで江湖に来た夢を見ているようで、ふだんから簑と笠をまとう暮らしにそむいているのを痛感する。琴の調べ「思帰の曲」によせて、君たちの詩に発した思いを一曲二曲とつまびいてみよう。

（担当　西岡　淳）

一九二三（施注三三―七）

頃年楊康功使高麗還奏乞立海神廟於板橋僕嫌其地湫隘移書使遷之文登因古廟而新之楊竟不従不知定國何従見此書作詩稱道不已僕不能記其云何也次韻答之

頃年、楊康功　高麗に使して、還って奏して海神廟を板橋に立てんことを乞う。僕　其の地の湫隘なるを嫌って、書を移して之を文登に遷さしめて古廟に因りて之を新たにせんとす。楊　竟に従わず。知らず、定国　何れ従りしてか此の書を見て、詩を作って称道して已まず。僕　其の云何というかを記す能わざるなり。次韻して之に答う。

1　退之仙人也　　退之は仙人なり
2　游戲於斯文　　斯の文に游戯す
3　談笑出奇偉　　談笑　奇偉を出だして
4　鼓舞南海神　　南海の神を鼓舞せしむ
5　頃者三韓使　　頃者　三韓の使
6　幾爲蛟鱷呑　　幾ど蛟鰐の為に呑まれんとす

7 歸來築祠宇　帰り来たって祠宇を築き
8 要使百賈奔*　百賈をして奔らしめんと要す
9 我欲遷其廟　我れ　其の廟を遷して
10 下數浮空羣**　下　空に浮かぶ群れを数えんと欲す
11 移書竟不從　書を移すも竟に従わず
12 信非磊落人　信に磊落の人に非ず
13 公胡爲拳拳　公　胡爲れぞ拳拳として
14 繫此空中雲　此の空中の雲を繫ぐ
15 作詩頌其美　詩を作って其の美を頌す
16 何異刻劍痕　何ぞ剣の痕を刻むに異ならん
17 我今已括囊　我れ　今　已に囊を括る
18 象在六四坤　象は六四の坤に在り

〔原注〕板橋、商賈所聚（板橋は、商賈の聚まる所なり）

〔＊＊〕謂登州海市（登州の海市を謂う）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○頃年　近年。○楊康功　楊景略（一〇〇四～八六）。康功はその字。施注は、「洛陽の人」というが、この詩に先立って元豊八年（一〇八五）に作った「楊康功　石有り、状は酔道士の如し、為に此の詩を賦す」（『合注』巻二六）の詩題の査注には、「楊康功　華陰の人なり」という。華陰は陝西省にある。治平二年（一〇六五）の進士で、提点両浙刑獄、龍図閣待制、知揚州などを歴任した。○使高麗還　楊景略は、元豊六年九月に「高麗祭奠使」に任命され（『続

資治通鑑長編』元豊六年九月丙辰）て、翌元豊七年七月に「密自り板橋に至り、航海して往く」（徐兢『宣和奉使高麗図経』巻二）とある。帰朝については、元豊七年十月に、楊景略が帰朝途上、高麗に同道した銭勰とともに中書舎人に任命されている（『続資治通鑑長編』元豊七年十月乙亥）こと、および当時知登州であった蘇軾が元豊七年十一月のはじめには離任して登州を離れている（孔凡礼『蘇軾年譜』中冊六九二頁）ことから、元豊七年十月の後半の頃であったと思われる。○板橋　いまの山東省膠州市。元祐三年（一〇八八）には膠西県がおかれ、市舶司も設置された。○湫隘　土地が低くせまいこと。白居易「卜居」詩（『白居易集箋校』巻一九）に、「但だ道う　吾が盧は心便ち足ると、敢えて辞せんや　湫隘と囂塵とを」とある。○移書　公的な文書を差し出すこと。蘇軾「程徳林が真州に赴くを送る」詩（『蘇軾詩注解（二十三）』）の注も参照。蘇軾が楊景略に差し出した文書は伝わらない。○文登　いまの山東省蓬莱市。北宋では登州に属した。蘇軾「始め文登の海上に於て白石数升を得たり…」詩（『蘇軾詩注解（三）』）の詩題の注も参照。○古廟　海神を祀る古い廟。山東半島には各地に海神廟が建てられていた。于欽『斉乗』巻五の「蓬莱閣」の項に、「登州の北三里の海浜、田横寨　相対す。本と海神廟の基なり。宋の治平中に、郡守朱処約　其の地太だ高峻なるを以て廟を移して西せしめて平地に置く。此に於て閣を建つ」とある。また、蘇軾「登州の海市」詩（『合注』巻二六）の叙には、海市すなわち蜃気楼を見ることがかなうように、「海神広徳王の廟に禱る」とある。○定国　王鞏のこと。定国はその字。「顔復を送り、兼ねて王鞏に寄す」詩（『蘇東坡詩集』第四冊二七七頁）の注を参照。○作詩　王鞏が蘇軾の文書を称えて作った詩は伝わらない。

1○退之　韓愈の字。2○游戯一句　遊戯は、遊び戯れること。『楚辞』「遠遊」の王逸の解題に、「仙人に託配して、与に俱に遊戯し、天地を周歴して、所として到らざる無し」という。斯文は、『論語』子罕篇に、「天の未だ斯の文を喪さざるや、匡人其れ予を如何せん」とあるように、ひろくは文明を意味するが、ここでは高雅な文章、ひいては学問の意に解する。すなわち一句は学問の世界に遊ぶことをいう。3○奇偉　非凡であること。韓愈「県斎に懐う有り」詩（『韓昌黎集』巻二）に、「少小にして奇偉を尚ぶも、平生　悲咤するに足れり」とある。4○鼓舞一句　韓愈が「南海の神の廟の碑」（『韓昌黎集』巻三一）で、「海は天地の間に於て物為ること最も鉅きく、三代聖王自り祀の事あら

ずということ莫し。伝記に考えうるに、而も南海の神次　最も貴くして北東西の三神と河伯との上に在り」と、海と河の諸神のなかで南海の神を最も高く位置付けていることを踏まえていう。鼓舞は、勇気を与えて奮い立たせること。『周易』繫辞上に「之を鼓し之を舞して以て神を尽くす」とある。56〇頃者・幾為二句　二句は起居郎であった楊景略が銭勰とともに高麗祭奠使を拝命して、「七月二十四日、同に密州自り洋に発す。楊起居　大洋に至るや東風に遇いて登州に飄き回らさる。八月二日、再び洋に発し、十三日、方めて高麗境上に至る」（龎元英『文昌雑録』巻五）とあるように、大風に妨げられてあやうく遭難しかけたことをいう。頃者は施注では頃年につくる。三韓は、馬韓・辰韓・弁韓をいう（『後漢書』東夷伝）。蛟は、みずち。鰐は、わに。ともに水中に潜む怪物をいう。韓愈「瀧吏」詩（『韓昌黎集』巻六）に、「鰐魚　船より大にして、牙眼　儂を怖殺す」とある。蘇軾は「見る所の開元寺の呉道子が画ける仏の滅度を記して以て子由に答う」詩（『蘇東坡詩集』第一冊三七〇頁）に、「従横　固より已に孫・鄧を蔑んじ、巨鰐の小鮮を呑むが如くなること有り」と詠じているが、『合注』巻四ではその王注に『物類相感志』を引いて「南海に鰐魚有り、其の状　鼉の若し」という。8〇百賈　もろもろの商人たち。『漢書』尹翁帰伝に、「（尹翁帰）公廉にして餽を受けず、百賈　之を畏る」とある。10〇浮空群　蜃気楼をいう。蘇軾は「登州の海市」（『合注』巻二六）に、「東方の雲海　空しく復た空し、群仙　空明の中に出没す。浮世を蕩揺して万象を生ず、豈に貝闕の珠宮を蔵する有らんや」と詠じている。12〇磊落人　度量が大きい人物。韓愈「皇甫湜が公安園池の詩を読み、其の後に書す　二首」その一（『韓昌黎集』巻六）に、「爾雅は虫魚を注す、定めて磊落の人に非ず」とある。13 14〇公胡・繫此二句　拳拳は、捧げ持って離さないさま。『礼記』中庸に、「子曰く、「回の人と為りや、中庸を択び、一善を得れば、則ち拳拳服膺して之を失わず」と」とある。空中の雲は、蘇軾が楊景略に差し出した文書の内容をたとえていう。『景徳伝燈録』巻八「池州南泉普願禅師」の項に、「汝の道うは、一片の雲、為復釘もて釘ち住むるか、為復藤もて纜ぎ著むるか」とある。二句は失われた文書を今さらながら持ち上げてみても無意味であることをいう。16〇刻剣痕　『太平御覧』巻七六九に『呂氏春秋』（「察今」）を引いて、「楚人に江を渉る者有り。其の剣、舟中自り水に墜つ。遽かに其の舟を契みて曰く、「是れ我が剣の従りて墜つる所なり」と」という。17 18〇我今・象在二句　括嚢は、ふくろを

くくるように口をつぐんでものを言わないこと。象は、卦や爻の解釈。『周易』坤卦の爻辞に「六四、嚢を括る。咎も無く誉れも無し」とあり、孔穎達の疏に「其の知を閉ざして用いず。故に括嚢と曰う」とある。○〔原注〕板橋は詩題の注を参照。○［＊＊］登州はいまの山東省蓬莱市。海市は、蜃気楼のこと。蘇軾は「登州の海市」（『合注』巻二六）の叙に、「予　登州の海市を聞くこと旧し」という。

韓退之はまことに仙人です、学問の道に自在に心を楽しませ、談笑の間にも非凡な文章を作って、南海の神を感動させるのですから。

先ごろの高麗への使者も、あわや大鰐の餌食となるところを無事に帰着したので、そのお礼に廟を建てるために、商人たちを費用の工面で駆けずり回らせようとしました。

わたしはその廟を他所に建ててはどうか、下に蜃気楼を望める場所がよかろうと、書面で言ってやりましたが、当の相手はついに聞く耳をもたずじまい、まことに度量ある人物ではありません。

あなたはどうしてうやうやしく、空を漂う雲をつなぎとめようとなさるのでしょうか。詩を作って（わたしの文書を）誉めてくださっても、剣を水に落とした者が舟のへりを刻んで印をつけるのと違いがありましょうや。今はもう口をつぐんだわたしは、「嚢（の口）を括る」とかいうあれで、その象（の解）は坤の卦の六四にありますよ。

（担当　中　裕史）

一九二四（施三三―八）

沐浴啓聖僧舎與趙徳麟邂逅

啓聖の僧舎に沐浴して趙徳麟と邂逅す

1 南山北闕兩非眞　　南山と北闕　両つながら真に非ず
2 東潁西湖跡已陳　　東潁と西湖　跡　已に陳し
3 季子來歸初可喜　　季子来帰す　初めて喜ぶ可し
4 老聃新沐定非人　　老聃新たに沐す　定めて人に非ざらん
5 酒清不醉休休暖　　酒清んで醉わず　休休として暖かに
6 睡穩如禪息息勻　　睡り穩やかにして禅の如く　息息として勻う
7 自笑塵勞餘一念　　自ら笑う　塵労の一念を余すを
8 明年同泛越溪春　　明年　同に泛かばん　越溪の春

元祐七年（一〇九二）五十七歳の作。

○啓聖僧舎　啓聖禅院のこと。『石林燕語』巻一に「啓聖禅院は太宗降誕の地なり。太平興国中に既に建てられて寺と為し、以て太宗の神御（肖像）を奉る」とある。『汴京遺跡志』巻一一によると、太平興国六年（九八一）に建てられ、雍熙二年（九八五）に完成して、その名を賜るとある。僧舎は、寺院のこと。○趙徳麟　趙令畤（一〇六一～一一三四）、徳麟はその字。『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八五の詩の詩題の注を参照。趙令畤は、宋の太祖の子燕懿王の玄孫で、蘇軾が知潁州のときに、簽書潁州公事としてつとめ、蘇軾はその才能を愛して、朝廷にとりたてるように上書した。元祐七年十二月二十二日との日付がある「再び宗室の令畤を薦むる箚子」（『蘇軾文集』巻三五）は、本詩制作のすぐ後に作られた。○邂逅　期せずして会うこと。宋本では邂逅のあとに「一首」と付されている。

1○南山北闕　南山は、隠棲の地を、北闕は、朝廷を指す。孟浩然「歳暮に南山に帰る」詩（『孟浩然集』巻三）に「北闕　上書を休め、南山　弊廬に帰る」とある。2○東潁西湖　東潁は、潁州を指す。西湖は、潁州の西湖とする説も

あるが、ここでは一韓智翊の聞書に「此ノ西湖ハ東潁ノ西湖デアルト注ニ云ヘドモ、已ニ上ノ句ニ南山北闕ト両処ヲ云（ヘバ）則チ下モ西湖ハ杭州ノ西湖ヲ云（フ）可（キ）カゾ。西湖ト云ヘバ即（チ）杭州ゾ」（『四河入海』巻三の二六）というのに従い、蘇軾の心に強く残る地として杭州の西湖をさすと捉えておく。○跡已陳　さきに遊興した所も遠い過去のもののようであること。王羲之「三月三日蘭亭詩の序」（『晉書』王羲之伝）に「向の欣びし所も、俛仰の間に、已に陳跡と為りぬ」とある。3○季子一句　『春秋穀梁伝』閔公元年に「秋八月、公及び斉侯　洛姑に盟す。季子を納むるを盟するなり。季子来帰す。其の季子と曰うは、之を貴ぶなり、其の来帰と曰うは之を喜ぶなり」とある。ここでは太祖の血をひく趙令畤を魯公の子である季子にたとえて、都への帰還を喜んでいる。4○老聃一句　『荘子』田子方篇に「孔子　老聃に見ゆ。老聃　新たに沐し、方に将に被髪して乾かさんとす。慤然と（じっと）して人に非ざるが似し」とある。ここでは蘇軾自身の髪も結わない沐浴後の姿を老子になぞらえていう。5○酒清一句　『詩経』小雅「信南山」に「祭るに清酒を以てし、従うるに騂牡を以てし、祖考に享す」とあり、清酒は、祭祀のための酒をさす。『詩経』唐風「蟋蟀」に「楽しみを好むも荒む無く、良士は休休たり」とあり、休休は、安らぎ落ち着くさまをいう。ここでは太宗の神御（肖像）を奉る啓聖禅院という儀礼的な場において、酔うためではなく安らかに酒を頂き、暖まることをいう。6○息息匀　一息一息がおだやかで調っていること。蘇軾「謫居三適　三首」その二「午窓に坐睡す」詩（小川環樹・山本和義選訳『蘇東坡詩選』二九四頁参照）に「身心　両つながら見えず、息息　安らかに且つ久し」とある。7○塵労　世俗の苦労ごとにこころを煩わすこと。仏教では「煩悩」をさしていう場合もある。「峡に入る」詩（『蘇東坡詩集』第一冊五一頁）の注を参照。○一念　ひとつの思い。白居易「往を思い今を喜ぶ」詩（『白居易集箋校』巻二八）に「謫居して終に郷関の思いを帯び、領郡して猶お邦国の憂いを分かつ、争でか似かん　如今　賓客と作りて、都て一念の心頭に到る無きに」とある。8○明年一句　蘇軾がたびたび越州への赴任を請うたことは、「兵部尚書に任ぜられて外郡を乞う箚子」・「両職を辞して郡を乞う箚子」・「第二箚子」（『文集』巻三七）などに見える。ここでは、来年の春に越州の渓流で趙令畤と舟遊びをすること。

隠棲の地も、宮仕えの地も、ともに幻のごときものであり、潁州や西湖でのできごとも、はや遠いむかし。

一九

二〇

趙令畤どののご帰還に喜びも一入、沐浴したばかりの私は（髪も結わず）さぞやひどい姿であろう。澄んだ酒は酔うことなく安らかに体を暖め、坐禅のように静かな眠りは一息一息穏やかだ。なんともお笑いぐさではあるが、世俗への一つの執着が残ってはいる。（それは）来年の春に趙令畤どのと越州の渓流で舟遊びをすること。

一九一八（施三三―九）

次韻王仲至喜雪御筵

王仲至が「雪を御筵に喜ぶ」に次韻す

1 三軍喜氣鑠飛花　三軍の喜気　飛花を鑠かすも
2 睡起空驚月在沙　睡りより起きて空しく驚く　月の沙に在るか、と
3 未集驊騮金騕褭　未だ驊騮と金騕褭には集まらざるに
4 故殘鳩鵲玉横斜　故に鳩鵲に残りて　玉　横斜
5 偶還仗内身如寄　偶たま仗内に還りて　身　寄するが如く
6 尚憶江南酒可賒　尚お憶う　江南　酒の賒る可きを
7 宣勸不多心自醉　宣勧多からざるも　心自ら酔う
8 强扶衰白拜君嘉　強いて衰白を扶けて　君の嘉を拝す

元祐七年（一〇九二）五十七歳の作。

○王仲至　王欽臣（字は仲至）のこと。『蘇軾詩注解（一）』に収める作品番号一六〇二の詩題の注を参照。王欽臣は『続資治通鑑長編』によれば、元祐六年九月に工部侍郎となり、十一月には給事中となっている。『能改斎漫録』巻一八に「東坡は元祐の末に礼部尚書と為り、人の雪を喜ぶ詩を送るを夢み、是れ王仲至が与えし所と云う。覚めて後唯だ一聯を記すのみ。（王）仲至は是に因りて以て章を成す」とある。蘇軾は十一月二十三日に礼部尚書となっており（孔凡礼『蘇軾年譜』下冊一〇六八頁）、この詩はそのころ作られたのであろう。○喜雪御筵　元祐七年十一月に哲宗が郊祀を行った際、「翌日　風寒相属し、時雪期するが如く、宰臣・執政・侍従の官は皆な詩を進めて賀す」（『続資治通鑑長編』）とある。郊祀のあとの雪を瑞祥として寿ぐ詩が多くの官僚によって作られていた。御筵は、宮中の殿庭をさす。張説「玄武門に侍射す　并びに序」（『張燕公集』巻三）に「射観　玄闕に通じ、兵欄　御筵に闢く」とある。

1○三軍一句　三軍は全軍のこと。『蘇軾詩注解（一）』に収める作品番号一六〇〇の詩の注を参照。元祐七年十一月に哲宗が郊祀を行った際に、蘇軾は兵部尚書の任にあり（『蘇軾詩注解（二十四）』に収める「郊祀の成るを慶する詩」詩の題注を参照）、ここでの三軍は、郊祀の儀式に関わる儀仗兵をさす。『詩話総亀』前集巻五〇に、揚州の知事であった李紳の宴席で章孝標が作った「春雪」という詩に「朱門　暁に到るも　尺を盈たすこと難し、尽く是れ三軍の喜氣が消かす」とあり、全軍の喜気の熱が雪を溶かすことをいう。飛花は雪のこと。李白「雪に対して、酔いて後に王歴陽に贈る」詩（『李太白全集』巻一二）に「歴陽　何ぞ山陰の時に異ならん、白雪飛花　人目を乱す」とある。2○空驚　ただ驚嘆するばかりであることをいう。蘇軾「夜飲、畢推官に次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊四九一頁）を参照。○月在沙　白く輝く月光が地上の沙を照らし、地面が白くかがやくさま。盧仝「月下に徐希仁に寄す」詩（『全唐詩』巻三八八）に「夜半　沙上に行き、月瑩　天心明らかなり、沙月　浩として際まり無く、此の中に離思生ず」とある。ここでは、雪が地上にうっすらと積もって、あたり一面が白くなったようすをいう。3○驊騮金騕褭　驊騮も騕褭も古の名馬。驊騮は、『荘子』秋水篇に「騏驥・驊騮は一日にして千里を馳す」とみえる。騕褭は、司馬相如「上林の賦」（『文選』巻八）にみえ、その張揖の注に「騕褭は馬の金の喙に赤き色、一日に万里を行く者なり」と

ある。杜甫「天育驃騎の歌」（『杜詩詳註』巻四）に「如今　豈に騕褭と驊騮と無からんや、時に王良・伯楽無ければ死して即ち休む」とある。4〇故残一句　鵁鶄は、漢の武帝の甘泉宮の外にあった建物の鵁鶄観をいう。司馬相如「上林の賦」（『文選』巻八）に、「鵁鶄に、過りて露寒を望む」とある。杜甫「宣政殿より朝を退き晩に左掖を出づ」詩（『杜詩詳注』巻八）に「雲は蓬莱に近くして常に五色、雪は鵁鶄に残りて亦た多時」とあるように、ここでも宮殿を指して使われている。玉は、雪のさまをいう。李咸用「小雪」詩（『全唐詩』巻六四五）に「崆峒山の北面、早に想う玉　丘を成すか、と」とある。横斜は林逋「山園の小梅　二首」その一（『林和靖先生詩集』巻二）に「疎影横斜にして水は清浅、暗香浮動して月は黄昏」とあるように、影が横や斜めにひろがること。ここでは宮中の建物に残って光をはなつ雪のさまをいう。5〇偶還　蘇軾は元祐七年九月に揚州から都に戻った。『蘇軾詩注解（二十三）』に収められた作品番号一九〇四の詩を参照。〇仗内　『新唐書』儀衛志に「凡そ朝会の仗、三衛番がわる上り、分けて五仗と為す」とあり、仗は儀仗兵をいう。仗内とは、蘇軾「穆父舎人が再び之の什を贈るに次韻す」詩（『合注』巻二六）の「我の白頭にして仗下へ来たるを憐れみ、君の黄気　眉間に発するを看る」とある仗下と同じく、朝廷をさす。〇身如寄　かりそめに身をおくこと。蘇軾「雲龍山人張天驥に過る」詩（『蘇東坡詩集』第四冊二九七頁）に「吾が生　寄するが如き耳、帰計　早からざるに失す」とある。6〇尚憶一句　朝廷に召喚される以前に、酒をつけで購入していた（賒はただ単に酒を買う意にも使われる）江南での暮らしを懐かしんでいる。蘇轍「子瞻の臨皋に新たに南堂を葺くに次韻す　五絶」（『欒城集』巻一二）に「隣人は漸く熟れて酒を賒るを容し、故客は親ら留まり為に蔬を種う」とある。これは蘇軾が黄州に流謫されていた元豊六年（一〇八三）のことを詠じたものである。7〇宣勧　宮廷儀礼のなかで飲むありがたい酒のこと。『宋史』礼志一五に「宣勧の若きは即ち席を立ちて後に躬し、飲み訖りて賛して再び拝す」（躬は、からだを折り曲げて慎むこと）とある。『詩話総亀』前集巻二九に「宣勧の字、東坡数しば之を使う」とあるように、蘇軾「潁叔が燈を観るに次韻す」詩（『合注』巻三六）に「振旅して帰り来て還た宴に侍す、十分の宣勧　恐らくは勝え難し」とあり、「王晉卿が詔を奉りて高麗の宴射を押るに次韻す」詩（同上）に「宣勧辞せず金盌の側つを、酔いて帰れば争いて玉鞭の長きを看る」とある。〇心自酔　重い任務と責任に心が囚われるこ

とをいう。『後漢書』劉寛伝に「霊帝　頗る学芸を好み、毎に（劉）寛を引見し、常に経を講ぜしむ。（劉）寛嘗て坐に於て酒を被りて睡伏す。帝問う「太尉酔うか」と。（劉）寛仰ぎて対えて曰く「臣　敢えて酔わず、但だ任重く責大にして、憂心　酔うが如し」と。帝　其の言を重んず」とある。8〇衰白　老いて体力が衰え、髪が白くなること。『蘇軾詩注解（七）』に収める作品番号一六七三の詩の注を参照。〇拝君嘉　『春秋左氏伝』襄公四年に、「鹿鳴は君が寡君を嘉する所以なり。敢えて嘉を拝せざらんや」とある。魯君の命を受けて晉に遣わされた穆叔（叔孫豹）が、晉侯によるもてなしの「肆夏」や「文王」の曲では拝をしなかったが、「我に嘉賓有り」の詞がある「鹿鳴」の曲が奏されたので、それを受けて拝をしたという故事から、ここでは、天子から嘉しとされることをありがたく受けることをいう。

儀仗兵の喜びの気が舞い降る雪をとかしたが、眠りからさめると白い月光が地一面を覆ったかとただ驚く。雪は驊騮や金色の喙の騕褭のような立派な駿馬には降り積もってはいないのに、選んだかのように宮殿（の屋根）の瓦に残って、斜めに輝きを放っている。

たまたま戻った朝廷は、わたしにとっては仮に身を寄せるところであり、なおも思い出されるのは酒をつけで買えた江南のことなのだ。儀式で頂くありがたい酒は微量でも、その重責に心は自ずとひれ伏し、なんとか老い衰えた体を振るい起こして天子のご恩にお応えしたいと思うのだ。

（担当　中　純子）

一九二六（施三三―一〇）

僕所藏仇池石希代寶也王晉卿以小詩借觀意在於奪僕不敢不借然以此詩先之

僕が蔵する所の仇池石は希代の宝なり。王晉卿　小詩を以て借りて観る、意は奪わんとするに在り。

僕　敢えて借さずんばあらず、然れば此の詩を以て之に先んず

1 海石來珠宮　海石　珠宮より来たり
2 秀色如蛾綠　秀色　蛾緑の如し
3 坡陀尺寸間　坡陀たる尺寸の間
4 宛轉陵巒足　宛転として陵巒足れり
5 連娟二華頂　連娟たり　二華の頂
6 空洞三茅腹　空洞たり　三茅の腹
7 初疑仇池化　初めは仇池の化するかと疑い
8 又恐瀛洲蹙　又た瀛洲の蹙まるかと恐る
9 殷勤嶠南使　殷勤なり　嶠南の使
10 饋餉揚州牧*　揚州の牧に饋餉す
11 得之喜無寐　之を得て喜んで寐ぬること無く
12 與汝交不瀆　汝と交わって瀆れず
13 盛以高麗盆　盛るに高麗の盆を以てし
14 藉以文登玉**　藉くに文登の玉を以てす
15 幽光先五夜　幽光　五夜に先だち
16 冷氣壓三伏　冷気　三伏を圧す
17 老人生如寄　老人　生　寄するが如し

18 茅舎久未卜　茅舎　久しく未だト せず
19 一夫幸可致　一夫　幸いに致す可し
20 千里常相逐　千里　常に相逐わん
21 風流貴公子　風流の貴公子
22 竄謫武當谷　武当の谷に竄謫せらる
23 見山應已厭　山を見て応に已に厭くべし
24 何事奪所欲　何事ぞ　欲する所を奪わんとする
25 欲留嗟趙弱　留めんと欲すれば趙の弱きを嗟く
26 寧許負秦曲　寧ろ許して秦に曲を負わせん
27 傳觀愼勿許　伝え観せしむること慎んで許す勿かれ
28 間道歸應速　間道より帰ること応に速やかなるべし

〔原注〕僕在揚州、程徳孺自嶺南解官還、以此石見遺（僕　揚州に在りしとき、程徳孺　嶺南自り官を解いて還り、此の石を以て遺らる）

〔＊＊〕僕以高麗所餉大銅盆貯之、又以登州海石如碎玉者附其足（僕　高麗が餉る所の大なる銅盆を以て之を貯え、又た登州の海石の砕玉の如き者を以て其の足に附す）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○仇池石　蘇軾がもっていた双石のこと。本注解に収める「次韻して銭穆父・蔣穎叔・王仲至に和し奉る　四首、「仇池」に和せらる」（作品番号一九二〇）の注を参照。○王晉卿　王詵のこと。晉卿はその字。『蘇軾詩注解（一）』に

収める作品番号一五九〇の詩の注を参照。

1〇珠宮　真珠の宮殿。『楚辞』九歌「河伯」に、「魚鱗の屋　龍の堂、紫貝の闕　珠の宮」（珠は朱にも作るが、意味は通じる）とある。2〇蛾緑　色つやのある眉墨。緑は、つやのある黒さをいう。「次韻して舒教授が余の蔵する所の墨を観るに答う」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊六三六頁）を参照。3〇坡陀　起伏があって平らでないさま。杜甫「橋陵の詩三十韻、因りて県内の諸官に呈す」詩（『杜詩詳注』巻三）に、「坡陀として厚地に因り、却略　峻屏羅なる」とある。4〇宛転　くねくねと曲がり続くさま。「焦千之　恵山泉の詩を求む」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊三〇四頁）を参照。〇陵巒　連なる峰々。木華「海の賦」（『文選』巻一二）に、「龍門の岑嶺たるを啓き、陵巒を躒りて嶄鑿す」とある。5〇連娟　女性の細くしなやかなさま。ここでは、山のいただき付近の稜線が美しいことをいう。『蘇軾詩注解（一）』に収める作品番号一五九〇「王晉卿　煙江疊嶂図を作す。僕　詩十四韻を賦し、晉卿之に和す……」詩に、「巖谷を将て窈窕を乱さんと欲し、眉峰修嫣にして連娟に誇る」とある。その注を参照。〇二華　太華山と少華山（ともに陝西省）。「周邠が「雁蕩山の図を寄す」に次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊一二一頁）を参照。6〇空洞　うつろでがらんとしていること。〇三茅　茅山（江蘇省）のこと。句曲山ともいう。その名は、漢代に咸陽の三茅君と呼ばれた人々が、道を得てその山に住んだことに因むという（『梁書』陶弘景伝）。7〇仇池　本注解に収める作品番号一九二〇の詩の注を参照。8〇瀛洲　東方の海中にあって神仙が住まうとされた山。「夜　秘閣に直して王敏甫に呈す」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊五九三頁）を参照。9 10〇殷勤・饋餉二句　殷勤は、慇懃に同じ。ねんごろに。嶠南使は　蘇軾の母方の従弟である程子元（字は徳孺）をさす。嶠南は、嶺南に同じ。『後漢書』馬援伝に「嶠南悉く平らぐ」とあり、注に「嶠は、嶺嶠なり」という。饋餉は、人に食物や物を贈ること。原注にあるように、二句は蘇軾が知揚州の任に在ったとき、職（『続資治通鑑長編』元祐五年八月乙未の記事によれば、提点広南東路刑獄）を辞して嶺南から還った程子元より、この双石を贈られたことをいう。11〇得之一句　『孟子』告子下篇に、「魯　楽正子をして政為らしめんと欲す。孟子曰く、「吾れ之を聞きて、喜びて寐ねられず」と」とある。12〇与汝一句　『周易』繫辞下に、「君子は上交して諂わず、下交して瀆れず」とある。13 14〇盛以・藉以二

句　文登すなわち登州（山東省）の海岸の石・「文登の玉」については、すでに作品番号一六二三「始め文登の海上に於て白石数升を得たり、芡の実の如くにして枕と作す可し……」詩（『蘇軾詩注解（三）』）に見え、またその石を石菖蒲を養う鉢に敷いたことが、作品番号一六二五「文登蓬萊閣の下、石壁千丈、海浪の戦う所と為り、時に砕裂有り、淘灑されること久しく、皆な円熟して愛ず可し。土人此を弾子渦と謂うなり。数百枚を取りて以て石菖蒲を養い、且つ詩を作りて垂慈堂老人に遺る」詩（同）に詠ぜられる。その注を参照。15〇五夜　一夜の五区分。意味するところは五更と同じだが、それぞれの呼称は「甲夜、乙夜、丙夜、丁夜、戊夜」という。陸倕「新刻漏の銘」（『文選』巻五六）に、「六日　弁ずる無く、五夜　分かれず」とあり、李善注に衛宏『漢旧儀』を引いて、「夜漏　起これば、省中　火を用い、中黄門　五夜を持す。甲夜、乙夜、丙夜、丁夜、戊夜なり」とある。16〇三伏　初伏（夏至後の三番目の庚の日）、中伏（四番目の庚の日）、末伏（立秋後の最初の庚の日）のこと。伏は、陰の気が起ころうとするが陽の気に抑えられて蔵伏している意で、この時期は一年のうちで最も暑いとされる。17〇生如寄　蘇軾は自らの人生を語るに際してしばしばこの表現を用いる。作品番号一八九三「芝上人が廬山に遊ぶを送る」詩（『蘇軾詩注解（二十一）』）の13句の注を参照。18〇茅舎一句　茅舎は、かやぶきの家。粗末な家。自分の家の謙称。「攙雲篇」の注（『蘇東坡詩集』第一冊四七二頁）を参照。卜は占う意で、占って住まいを決めることを卜居という。ここでは、自分が隠棲する場所が定まらないままであることを述べる。19 20〇一夫・千里二句　瑞渓周鳳は、「蓋シ言フココロハ、此ノ石重カラズ、一夫ノ力ヲ以テ致ス可シ。故ニ田ニ帰リ茅ヲ誅ルノ日、必ズ当ニ千里相随フベキナリ」（『四河入海』巻八の三）という。21 22〇風流・竄謫二句　風流の貴公子は、王詵をさす。王詵は宋初の功臣である王全斌の後裔で、詩書画いずれにもすぐれていた。竄謫は、遠方の地へ放逐すること。武当は、均州（湖北省）の山の名。元豊三年（一〇八〇）、蘇軾が黄州（湖北省）に流されたとき、王詵もこれに連座して均州に流された。作品番号一五九〇「王晉卿　煙江疊嶂図を作す。僕　詩十四韻を賦し、晉卿　之に和す……」詩（『蘇軾詩注解（一）』）の注を参照。23〇見山一句 21 22句の注に掲げた作品番号一五九〇の詩には、王詵が均州の山水を巧みにえがいたことが述べられる。25 26〇欲留・寧許二句　いわゆる「璧を完うして還る」の故事をふまえる。戦国時代、趙の恵文王が和氏の玉（璧）を得たところ、

秦王が十五の城（まち）を玉と交換したいと要求してきた。恵文王は宦者繆賢の食客藺相如に知勇があると聞き、相如を召して相談した。相如は、「秦は彊くして趙は弱し、許さざる可からず」と答え、秦がもし約束を違えたらどうするかと問うと、「秦　城を以て璧を求むるに、趙　許さずんば、曲（つみ）は趙に在り。趙　璧を予うるに、秦　趙に城を予えずんば、曲は秦に在り。之の二策を均ぶるに、寧ろ許して以て秦に曲を負わしめん」と答えた。かくして藺相如は自ら使者となって秦に赴き、身命を賭して秦王の非を責める一方、従者に命じて和氏の玉をひそかに趙に持ち帰らせた。その後、藺相如自身も無事に趙に還ることができた（『史記』藺相如伝）。28〇間道一句　25 26句の注に引いた故事で、藺相如が和氏の玉を持ち帰らせるくだりは、「乃ち其の従者をして、褐を衣、其の璧を懐にし、径道より亡れて、璧を趙に帰さしむ」であり、その「径道」が、この句にいう間道に相当する。〇［原注］　9 10句の注を参照。〇［＊＊］　13 14句の注を参照。

この海石はわだつみの真珠の宮殿よりもたらされたもので、その美しい色あいは美女がつかうつやのあるまゆずみのようだ。わずか尺寸ばかりだが起伏に富んでいて、峰みねがくねくねと曲がり続いている。いただきは太華・少華の両山のようにしなやかで、茅山のように山腹にはがらんと穴があいている。はじめは仇池山が姿を変えたものではないかと疑い、次には瀛州がちぢまったものかもしれないとも思った。

この石は嶺南に遣わされた使者が、親切にも揚州知事の任にあった私に贈って下さったもの。手に入れたときは嬉しさで夜も眠れず、そなたとは親しんでもなれなれしくはしないでいよう、と思った。高麗から贈られたはちにこの石を据えて、登州で手に入れた細かな玉のような小石をそのまわりに敷くと、石は夜明けに先んじてかすかな光を放ち、ひんやりとした気は三伏の暑気を払った。

この年寄りの生は仮の宿りのようなもので、終のすみかも久しく定められないままでいる。けれどもこの石ならひとりで持ち運びができるから、千里の彼方までずっと携えてゆくつもりでいる。

さて風流の貴公子たる君は、かつては武当の山あいに流されていた。だから山ならそのとき飽きるほど見たはずなのに、今さらどうして（山のものを）欲しがって人から奪おうとなさるのか。和氏の璧（双石）を手もとに留めようとすれば、趙（私）の弱さを嘆くことになるから、いっそのこと願いを聞き入れて秦（君）に罪を負わせようか。（ただし）どうかまわりの者に回して見せることは慎んでくださるように。さもなくば（従者に）石を持たせて抜け道からさっさと帰らせてしまいますよ。

一九二七（施三三―一一）

次天字韻答岑巖起

天の字の韻に次ぎて岑巖起に答う

1 一聲清蹕霧開天　一声の清蹕　霧　天を開く
2 百辟心荘豈貌虔　百辟　心荘かにして　豈に貌もて虔むのみならんや
3 回顧驚君珠玉側　回顧して君が珠玉の側なるに驚き
4 同升愧我秕穠前　同升　我が秕穠の前なるを愧ず
5 徘徊月色留壇影　徘徊せる月色　壇影を留め
6 縹緲松香泛蠟煙*　縹緲たる松香　蠟煙を泛かぶ
7 莫歎郎潛生白髪　歎く莫かれ　郎潛　白髪を生ずるを
8 聖朝求舊鄙鳶肩　聖朝　旧を求めて鳶肩を鄙しむ

〔原注〕近制、以椽燭松明易粔盆（近制、椽燭の松明を以て粔盆に易う）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○岑嚴起　岑象求のこと。嚴起はその字。梓州（四川省）の人。「岑著作を送る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊二三四頁）を参照。この時には戸部郎中として朝廷に在った（『続資治通鑑長編』元祐七年六月庚午）。○天字韻　天の字（1句）は下平一先の韻で、押韻字は、天・虔・前・煙・肩。万里集九の指摘によれば、この詩は先ず作品番号一九一六「穆父尚書が郊丘を祠るに侍して、天光を瞻望して、退きて相慶して、満を引きて酔吟するに次韻す」（『蘇軾詩注解（二十四）』）に次韻した詩を岑象求が蘇軾に贈り、蘇軾がその韻を再び用いた詩を作って岑象求に贈ったもの（『四河入海』巻一九の三）。詩の内容も、天子の祭祀をうたった元の詩の内容に沿う。岑象求の詩は伝わらない。1○清蹕　先払い。天子の行幸や貴人の行列の先に立ち、通行人をよけさせて道を清めること。漢・衛宏『漢官旧儀』巻上に、「輦　動けば、則ち左右の帷幄に侍する者は警を称え、車　駕すれば、則ち衛官　街を塡ぎ、騎士　路を塞ぎ、殿を出ずれば、則ち蹕を伝え、人を止めて道を清む」とある。2○百辟　諸侯。また、公卿大官。『詩経』大雅（生民之什）「仮楽」に、「百辟　卿士、天子に媚せらる」とあり、鄭箋に、「百辟は、畿内の諸侯なり」とある。○心荘　心からつつましやかであること。『礼記』緇衣に、「心荘かなれば則ち体舒なり」とある。3○珠玉側　珠玉は、美しくりっぱなものの喩え。ここでは岑象求をさす。『世説新語』容止篇に、「驃騎の王武子（済）は、是れ衛玠の舅なり。儁爽にして風姿有り。玠を見て輒ち歎じて曰く、「珠玉側に在り、我が形の穢れたるを覚ゆ」と」とある。4○同升　同じ官位に昇任すること。『論語』憲問篇に、「公叔文子の臣、大夫僎　文子と同じく公に升る。子　之を聞きて曰く、「以て文と為す可し」と」とある。○秕糠　糠秕ともいう。こまごましたもの。役に立たないもの。秕（粃は俗字）は、よく実らない米。しいな。糠（糠は別体）は、ぬか。『世説新語』排調篇に、「王文度（坦之）と范栄期（啓）と、倶に簡文の要うる所と為る。范は年大にして位小、王は年小にして位大なり。将に前まんとして、更ごも相推して前に在らしむ。既に移ること久しうして、王　遂に范の後に在り。王　因りて謂いて曰く、「之を簸い之を揚げ、糠秕　前に在り」と。范曰く、「之を洮い之を汰び、沙礫　後に在り」と」とある。5○徘徊一句　李白「月下独酌　四首」その一（『李太白全集』巻二三）に、「我れ歌えば　月　徘徊し、我れ舞えば　月　零乱す」とある。

壇は、祭祀が行われた祭壇のこと。詩題の注に掲げた作品番号一九一六の詩を参照。6○縹緲　かすかなさま。○松香　松明を焚いた香り。○蠟煙　蠟燭の煙。7○郎潜　卑官に低迷し続けること。郎は、宮中の警護官。「董儲郎中嘗て眉州に知たりて、先人と遊ぶ……」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊一六〇頁）を参照。8○求旧　『尚書』盤庚上に、「遅任言える有り、曰く、「人は惟れ旧きをを求む。器は旧を求むるに非ず、惟れ新しきを」と」とある。○鳶肩怒り肩。『旧唐書』馬周伝に、「鳶肩火色は、上に騰ること必ず速からんも、恐らくは久しきこと能わざる耳」とある。一韓智翃は、「今、当御代ハ永旧老成（ノ）人ヲ御用（イ）アル程ニ、鳶肩タル人ノ、年ワカクシテ肩ナンドノイカリテアルヲバ、之ヲ鄙シテ用イズシテ、老成人ヲ御用（イ）アル程ニ、必ズ岑厳起モ老（イ）タル程ニ、用イラルベキ程ニゾ」と記す。○〔原注〕　椽燭の松明は、大きな松明。粔盆は、大晦日の守歳のときに焚かれる焚き火（庭燎）のこと。『説郛』（宛委山堂本）弓六九に引く周密『乾淳歳時記』の「歳晩の節物」の条に、「除夜に至れば、則ち比屋五色の銭紙・酒果を以て六神を門に迎送す。夜に至り、賁燭粔盆して、紅は霄漢に映じ、爆竹鼓吹の声、喧鬧にして夜を徹す」とある。

御幸の先払いの一声で霧は晴れわたって天があらわれ、百官は容儀を正して心から天子をうやまいつつしむ。ふと振り返ればかたわらには珠玉のごとき貴君がおられ、籾殻のように中身のない自分の方が前にいるのがはずかしくなる。

たちもとおる月の光は祭壇を照らしつづけ、松明のかすかな香りが　燭の煙にまじってただよう。長らく昇進できぬまま年老いたことをお嘆きなさらぬよう。聖朝は怒り肩の若者ではなく、老成した人をこそ求めているのですから。

一九三〇（施三三―一四）

和叔盎畫馬
叔盎が画ける馬に和す

1 天驥德力備　天驥　徳力備わる
2 馬外龍麟中　馬外　龍麟の中
3 皇天不遣言　皇天　言わしめず
4 兀與圖畫同　兀として図画と同じ
5 駑駘飽官粟　駑駘　官粟に飽き
6 未受一洗空　未だ一洗して空しくするを受けず
7 十駕均一至　十駕　一至に均し
8 何事籥雲風　何ぞ雲風を籥むを事とせん

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○叔盎　趙伯充のこと。叔盎はその字。宋の宗室の一人で画を善くし、特に馬をえがくのにすぐれた。

1○天驥　一日に千里を駆ける駿馬。張協「七命」（『文選』巻三五）に、「天驥の駿、逸態は超越なり」とあり、李善注に「天驥は、天馬なり」とある。「蔡冠卿の饒州に知たるを送る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊二二三頁）を参照。○徳力　『論語』憲問篇に、「驥は其の力を称せず、其の徳を称す」とある。2○龍麟　駿馬の名。『太平御覧』巻八九五に引く、北魏・崔光『十六国春秋』に、「呂光　西域を討ちて平らげ（『太平御覧』は討の字を封に作るが、『晉書』四夷伝「亀茲国」の記述により改めた）、上疏して曰く、惟れ亀茲　三十六国の中に拠り、彼の王侯の命を制す。其の国城に入るに、天驥・龍麟・騕褭・丹髦、万計　厩に盈つ」とある。○皇天　大いなる天。天を尊んでいう。

『尚書』大禹謨に、「皇天は眷み命じ、四海を奄有して、天下の君と為る」とある。○不遣言　元稹「望雲騅馬の歌」（『元稹集』巻二四）に、「色沮まれて声悲しく　天を仰いで訴う、天の言わしめざること　君未だ知らず」とある。4○兀与一句　兀は、じっとして動かないさま。兀兀に同じ。一韓智翊は、「是レ様ニ、ヨイ馬ハ、徳モ力モ備（ヘ）テアルガ、只（ダ）モノヲ云ハヌマデデアルゾ。モノヲ云ハヌ程ニ、一向馬ノ如クニアルゾ。画馬ヲ真実ノ馬ト作（ツ）タガ坡ガウデゾ」と記す（『四河入海』巻一二の一）。5○駑駘　のろい馬。『楚辞』宋玉「九辯」に、「騏驥を却けて乗らず、駑駘に策って路を取る」とある。6○一洗空　杜甫「丹青引　曹将軍霸に贈る」詩（『杜詩詳注』巻一三）に、「須臾　九重に真龍出づ、万古の凡馬を一洗して空し」とある（この杜詩も馬の画について詠じたもの）。7○十駕　馬一頭が馬車を一日引く仕事の量が一駕で、十駕はその十回分。『荀子』修身篇に、「夫れ驥は一日にして千里、駑馬は十たび駕すれば、則ち亦た之に及ばん」とある。8○籥　ふむ（躡）。『漢書』礼楽志に引く「郊祀歌十九章」その十「天馬」に、「浮雲を籥み、晻として上に馳す」とあり、注に蘇林を引いて「天馬の上りて浮雲を躡むを言うなり」とある。

千里を駆ける馬は徳と力とを併せもつ。それは尋常の馬ではなく、西域の名馬龍麟のなかまだ。天はそんな名馬にものを言わせることはない。ただじっとしているその姿は画かれたこの馬と同じだ。

今の世は駑馬ばかりが官府の穀物を腹いっぱい喰らい、名馬にきれいさっぱり追い払われるような目にも遭わないでいる、「十日も費やせば名馬に肩を並べることはできる。どうして風雲を踏んで一日に千里も駆ける必要があるのか」などとうそぶきながら。

（担当　西岡　淳）

三三